

「大人は嫌い」「社会は冷たい」。虐待や貧困などさまざまな状況にあるか、または経験のある子どもや若者の多くが話してくるこの言葉は、重いメッセージだと思っ
ている。あるべき信頼が奪われた状態で成長していくことは、望ましい環境とは言えない。子どもたちの言葉を、これからの社会の在り方を問う道しるべにしていかなければならない。

山陽新聞を讀んで

川崎医療福祉大講師 直島克樹



子どもの支援環境充実を

かけている。員の多忙さや予算・人も関わらず、いまだに
父母の資質、児童相談手不足に加え、学校の課題であり続けている。支援のためのコミ
所や学校の対応の不備、先生が児童虐待に関することである。子ども
個人の恨みなど事件の原る支援について専門的たちを支える上で必要
因や問題を個人化するこな教育を受けているこ不可欠な支援環境の
とには注意が必要であとはほとんどないとい整備が後回しにされ、
う現状が存在してい支援者個人などの努力を山陽新聞には伝えて
る。こうした要因によに委ねられてきたこを山陽新聞には伝えて
って、児童養護施設なとは否定し難い事実で、もりたい。子どもや
どを退所した人たちへある。支援者が生命を落とす
のアフターケアに関し冒頭に述べた大人や支援者の中で、子ど

る。生命が奪われたことでも、さまざまな機関 社会を信用しない子どもたちを支えている人
は決して許されないが、との十分な連携が難し もや若者たちの存在 たちの声や置かれてい
二つの事件から見えてく いことを多くの研究や は、そういった社会の 現状を取材し、問題
るのは、子どもたちや若 実践現場がすでに示し 在り方も一つの要因で 点を広く社会に提起
者を守り、支えていく環 てきている。 あると思えてならな していくことを期待し
境の厳しさでもある。 何より大きな問題ない。どうしても支援や
支援に絶対はないの のは、児童虐待支援に 関わりが十分に届かな
で、こうすれば生命は救 おけるシステムやアフ い事態が生じるのであ
えたとか、事件は起きな ターケアに関する課題 る。実際、子どもの支
かったとは言い切れな は数十年以上前から何 援施設や機関、支援者
い。一方、児童相談所職 度も指摘されているに 自身が孤立し、疲弊し

「山陽新聞を讀んで」は月2回、日曜日に掲載します。